すみだとセツルメントの歴史

浦和大学非常勤講師　鈴木　みな子

家庭婦人のための授産所

一　都市下町で生まれた戦前社会事業

「社会福祉」という言葉は、現在の日本では、社会全体でめざす価値を示す大切なキーワードとして当たり前に使われていますが、戦前の日本においては、国が国民生活を保障するという考え方はありませんでした。明治中頃からの産業革命の進行により、都市の下町には、劣悪な住環境や低賃金で働く労働者とその家族、経済恐慌による失業者、医療制度の無いなかでの結核患者や多産など、多くの人々の生活困難が堆積していました。更に、東京には大正十二年に関東大震災が発生して下町区域を中心に東京府全体では約三十九万七千世帯が被害を受け、約十万人の死者、行方不明者が出ました。このような人々の生活困難に対応したのが民間社会事業です。東京の社会事業施設は『社会事業名鑑　昭和二年版』によれば、五百八ヵ所、『同昭和十二年版』によれば一、二二七ヵ所と増えて行きます。現在の社会福祉事業内容とは異なり、方面事業、児童保護、医療、公設市場の設置等が行われていました。その主力は民間事業によるものです。民間社会事業は、個人の篤志家や会員組織の社会事業団体、キリスト教や仏教などの宗教団体等の手によって担われ、キリスト教宣教師達による事業の創設も少なくありません。

二　すみだにおけるセツルメントの誕生

このような戦前社会事業の代表的な形態のひとつにセツルメントがあります。大正七年の米騒動に代表されるように人々の生活苦が増大し社会問題が激化していくなか、労働者居住区における貧困問題に対応する社会事業形態としてセツルメントの有効性が社会的認知を得て行きます。セツルメント事業の特徴は、地域の中に拠点となる施設を設置し、従事者もその地域に定住し、地域住民の隣人となって、人々の生活困難の物質的精神的救済を行って、地域全体の生活向上を目指していく、というものです。今の概念で言えば、地域福祉をめざす活動といえます。昭和初期には、東京府内のセツルメント数は九十七施設で、墨田区の前身である本所区には「救世軍社会殖民館」「東京帝国大学セツルメント」「本所基督教産業青年会」「光の友社」「婦人セツルメント」「愛国婦人隣保館」「東京市押上市民館」「東京市江東橋市民館」の八施設があり、向島区には「興望館セツルメント」「共励館」「修養園社会事業部汗愛寮」「甘露園」「東京市寺島市民館」の五施設がありました。

三　セツルメントで行われた事業

それぞれのセツルメントにおいては、保育事業、学童クラブや補習事業、キャンプ、母親教育、青年クラブや成人教育、失業者への宿泊事業や職業訓練・紹介、授産活動、無料または低額の診療、米や衣類の廉売などの事業を行うほか、法律・人事相談、消費組合活動を行うセツルメントもありました。なかでも、多くのセツルメントで行われていたのが児童を対象とした事業です。当時の本所・向島区の人口の約三分の一、要保護地区においては二分の一近くが子ども達であり、母親達は内職や就労により生計を支える必要があったこと、母親達は子育てを行う上で十分な教育を受けておらず、子育てを支援する祖父母のいない核家族であったこと、自宅の付近は工場地帯で子どもにとって危険の多い劣悪な住環境であったことなどから、この地区の幼い子ども達が好ましくない状況に置かれていたことが、まず、セツルメントの問題解決すべき課題であったのでしょう。

四　セツルメントと地域住民の信頼関係

英国や米国の実践から日本に伝わってきたセツルメントを地域住民はどのように受け止めたのでしょうか？　興望館セツルメントの戦前の利用者や職員の回想から分る事は、この地域には、低所得ではありましたが「意欲や向上心、知的関心の高い住民層」や「進取性の優れた住民層」が存在していた事です。人々はセツルメントの活動を積極的に受け入れて、新しいライフスタイルを築いて行きました。また、東京大空襲の際に興望館セツルメントが備蓄食糧を使い切って炊き出しを行ったところ、翌日に町内会で集めた米が届けられたエピソードがあります。地域の人々が、セツルメントを自分達の町を守るシンボルとして捉え、主体的に支えたことが分ります。社会福祉制度の無かった時代に展開したセツルメントと地域住民との信頼関係やパワーに、今またあらためて学ぶ時代が来ているように思います。

※　右上写真の説明
昭和六年当時、興望館セツルメントで行われていた事業の一つ「家庭婦人のための授産所」の風景